

フランツ・カフカ：『学会への報告』について

——時代背景を手がかりに——

北 川 尚

序

本論考はフランツ・カフカ (Franz Kafka) の『学会への報告』(Ein Bericht für eine Akademie) をカフカの生まれ育った時代背景を手がかりに解釈してゆくものである。この時代背景を考察するにあたり、1) ユダヤ教的側面、2) 社会的側面、3) 言語的側面という三つの側面において論究してゆくつもりである。『学会への報告』は当時カフカがおかれていた状況と密接な関係があり、世紀転換期のプラハ・ユダヤ人であるカフカの特殊な人間像が、この作品のなかに詳細に描写されていることが、結論として提出されるはずである。

1 物語の概要

『学会への報告』は作品集『村医者』(Ein Landarzt) に収められた短い物語であり、それはある登場人物の報告によって成り立っている。この物語の概要は、以下の通りである。

「敬愛おく能わぬ学会員の諸先生！

先生がたはわたくしに、猿であった時代の生活について学会へ報告を寄せるよう、もとめられましたが、これをわたしは光栄とするものがあります。」
(E. 147)

人間になった一匹の猿が、ある学会（何の学会かは書かれていない）で猿であった自分の過去を報告する。だが彼にとって、その過去に言及する

ことは、些か困難であるらしい。彼は猿であった過去を捨て去り、人間になるという未来だけを目指して努力してきたのであり、その結果、猿であった過去は彼方に遠のき、その記憶はごく僅かを留めるに過ぎないからである。しかもその過去（猿であること）へはもう二度と戻れないことが、この主人公によって比喩的に述べられている。

「昔の世界から吹きつけてくる強風は、次第に収まってきて、今では踵をひやりとさせるほどの隙間風でしかありません。その風の通り道は、以前わたくしがぐぐり抜けてきた……穴ですが、それが小さくなったことといったら、……ぐぐり抜けようとすれば、皮をむかれた赤裸になるのを覚悟しなければならぬほどのです。」（E. 148）

報告は続き、彼がアフリカの黄金海岸でハーゲンベック商会の狩猟探検隊に捕獲されたことが語られる。その時彼は砲弾を「一発は頬」に、「もう一発は腰の下」に食らう（E. 148）。彼は捕えられて、汽船の中甲板に置かれた狭い檻に入れられる。彼はそこで「生まれてはじめて、出口なしの状態」を体験し、同時に出口なしでは「生きることができない」ことを認識する。このことを語る時、彼は専ら「出口」という表現を用いる。「自由」という言葉は意識的に避け、自分が「求めたのは自由などでは」なく「出口にすぎない」と主張する（E. 149-150）。彼は、その出口なしの檻の中から観察を始める。そして檻の外に人間達を見ていた時、心の中にある高い目標が形成される。即ち、「人間同様」になるという目標である。彼はこの目標に「出口」を期待する（E. 151-152）。人々の真似をすることは、彼にとって容易なことだったらしく、まず唾を吐くこと、そしてパイプを燻らすこと、さらには焼酎を嗜むこと、そしてとうとう人間の言葉を喋ることまで体得する（E. 152-153）。

船がハンブルクに着き、彼は調教師に預けられる。そこで彼は二つの可能性を見出す。すなわち動物園か、演芸場かである。彼は演芸場を目指し、全力を振り絞る。そこに「出口」を期待するからである。「鞭の監視のもとに」わが身を置き、彼は調教に耐え抜く（E. 153-154）。

彼の人間化に拍車がかかり、彼は「自分で教師を雇用し、並んだ五つの

部屋に坐らせ、……部屋から部屋へと跳び歩いて、授業を受け」、遂に、「ヨーロッパ人の平均的な教養をわがものに」するに到る。ここに到達できたのは、「人間という出口を見出すことができたから」だと彼はいう。「自由を選ぶことは不可能だという前提に立つ以上、ほかの道」はなかったのだという (E. 154)。

深夜、彼が帰宅すると、調教をまだ終えていないチンパンジー娘が彼を待っている。昼間その娘を見ると、「調教のおかげで何が何やら分からなくなった動物の狂気」が、彼女の眼にあらわれている。それが分かるのは彼だけであり、それだけに、彼には我慢ならないのである (E. 154)。

2 様々な解釈

ブリッジウォーター (Patrick Bridgwater) はこの『学会への報告』に、教育と文明に関するニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche) の思想との類似性を見出している。彼の1974年の解釈には、*Zur Genealogie der Moral* や *Ecce Homo* が頻繁に引用され、「文明化とは人間に対する強制的な動物飼育」であることや、「人間を調教することが民主主義的ヨーロッパでは非常に大規模になった」ことや、「人間は猿以上に猿である」ことが述べられ、カフカはこの作品で、ニーチェやショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer) と並んで、文明化＝教育＝洗脳に抗議しているのだ、と結論づけている¹。

リー (Joo-Dong Lee) は1985年の論文で、カフカと道教との共通性を論じている。「檻」というメタファーは、カフカに於いてそうであるのと同様に、道教においても、人間の「自然なる自由」を拘束する機能として、あるいは「文明化された世界構造」として、しばしば用いられるというのである。そして『学会への報告』のテーマを、文明化による「人間本来の自然と自由」ならびに「調和のとれた宇宙的 (universell) 世界」の「喪失」であるとしている²。エリアス・カネッティ (Elias Canetti) が指摘するように、カフカはこの短篇を書いた1917年頃には中国に非常に興味を示しており³、リーの解釈はこうした事実を踏まえている。

ところでこれらの文明批判的、自然 (=宇宙) 崇拝的解釈は、その源流を1958年のエムリッヒ (Wilhelm Emrich) の実存主義的カフカ解釈 (後

に詳しく述べることになるが、)に辿ることができるように思う。ディーツフェルビンガー (Konrad Dietzfelbinger) の解釈 (1987年)、すなわち、猿ロートペーターは人間になる過程で、「鞭による盲目的な生存競争」に巻き込まれてゆき、動物としての、自然で調和のとれた「本来の秩序」を忘れてゆく、という解釈⁴も、この系譜に属するものだと思われる。

一方、メッケ (Günter Mecke) の解釈は、カイザー (H. Kaiser) に代表される精神分析的解釈の系譜に属している。メッケの解釈は、「猿は子供、子供の無邪気、童貞」であり、その子供である猿が船の中でホモセクシュアル (Homosexuelle) の船員達に出会う、つまり幼児が肛門期から同性愛期へ成長する、というものであり、『学会への報告』が、フロイト流のリビドーの発達という意味での個人史として解釈されている⁵。

ヒーベル (Hans Helmut Hiebel) はこの二つの系譜を結び合わせた解釈を行なっている。ヒーベルによれば、陰部への被弾という、文明による「去勢」を余儀なくされた猿は、それゆえ赤面ペーター (Rotpeter) という「名前」が与えられ、その「名前」のために、「秩序と言葉の世界」(つまり文明もしくは大人の世界)に入れられる。猿は「現実原則」に従い、「幻想的に認識される自由を断念」する。『学会への報告』は「系統発生史的、もしくは社会史的モデル」と「個人発生史的、あるいは心理学的モデル」を同時に表現しているとヒーベルはいうのである⁶。

ブリッジウォーター、リー、ディーツフェルビンガー、そしてヒーベルの解釈は以上のようなものであるが、これらの源流と思われるエムリッヒの解釈は、次のようなものである。

「しかしこのようにして人間になることは≫鞭打たれて追い立てられた進化<<である。この進化の過程で、彼は自由を犠牲にしなければならない。……同時に人間である彼にはかつての自由、そればかりか真実を、理解したり獲得したりすることは不可能なのである。……動物の門とは宇宙 (Universum) のことである。……動物は宇宙的 (universell) 自由の象徴である。」⁷

エムリッヒは「真実」に重点を置く。そして人間には既にそれらが理解できなくなっていることを強調する。この宇宙的「真実」とは、たとえば『変身』ではグレゴール・ザムザの毒虫という形で、突如として出現し、それは人間の理解を超えている、というものである。(Ibid., S. 118-127)

エムリッヒが活躍した50年代は実存主義が絶頂期であり、ドイツではハイデガー (Martin Heidegger) がよく読まれた頃である。当時はカフカも世界的に実存主義文学として読まれている。上に引用したエムリッヒの解釈にも、例えば『技術論』(*Die Technik und die Kehre*)などで、古代的、宇宙的観点から西欧文明全体を批判するハイデガーの影響が現れているように思う。すなわち「真実から遠ざかってしまった人間」つまり「進化」した近代人全体への批判である。

だがドイツの50年代には実存主義だけでは特徴付けられない別の側面がある。三島憲一氏はこの時代を次のように論じている。

「ナチスと戦後の混乱に疲れた人々は静かで落ち着いた生活をめざそうとした。……外面の現実よりは内面の豊かな文化と教養が重視される時代、涙と血と死の臭いのたちこめる現代よりは、故郷や安らぎや伝統がキャッチフレーズになる時代、……脱政治、没政治の時代であった。……全体としてみると、戦前からの内面的な大学の文化の連続性は驚くべきものがある。……ドイツ文学ではチューリッヒ大学のエミール・シュタイガーやボン大学のベンノ・フォン・ヴィーゼが法王的存在であった。彼らの文学観と文学研究法は……総じて非常に保守的で、社会や政治の問題にかかわらないですむような仕組みの理論を作り上げていた。」⁸

ここではシュタイガー (Emil Staiger) とヴィーゼ (Benno von Wiese) が挙げられているが、エムリッヒとて例外ではなく、エムリッヒのカフカ論は、カフカがおかれていた社会的背景への考察に欠けている。勿論このことだけでエムリッヒの業績が色褪せるものでは決していないが……。

エムリッヒに特徴的なこの社会背景への考察の欠落は、そのまま先に挙げた70年代から80年代にかけてのカフカ解釈に受け継がれているように思

われる。確かにカフカの作品は、カフカを取り囲む時代状況にのみ還元され得ない内容と表現の抽象性をもっている。とはいえ、あまりにも作者から離れてしまった解釈は、問題があるのではないだろうか。

既にデーメッツ(Peter Demetz)は1955年に、「カフカといえども、伝統の所産、かれの世代の同類ではなかったのか、かれの作品にもまた、歴史と個人精神との弁証法的絡み合いが、はっきりと顕現するのではないか」と書き、世紀転換期におけるチェコ・ユダヤ人の状況に言及している⁹。

1963年には、プラハで開催されたカフカ会議に於いてゴルトシュテュッカー(Eduard Goldstücker)が「ひとつの芸術作品は社会的現象である」と述べ、「当時のプラハは民族主義の戦いの最前線であった」こと、「ブルジョワ市民社会の終末をプラハのドイツ語作家達が感じ取っていたこと」などに言及する¹⁰。エルンスト・フィッシャー(Ernst Fischer)は同会議で、カフカの作品には、「崩壊してゆくハプスブルク帝国」の状況が詳細に認められる、と述べている。(Ibid., S. 369)

当時、東側陣営の文学者であったゴルトシュテュッカーとエルンスト・フィッシャーの解釈が社会主義リアリズムの傾向にあることは否定できないが、その是非はともかく、彼等がカフカを社会的政治的状況の中で読み直そうとしたことは評価しなければならない。

『学会への報告』はカフカを取り囲んでいた社会的状況と密接な関係を持っている。この物語はこの観点から読み直されるべきである。したがって、まずカフカのおかれていたこの状況が把握されなければならない。

3 同化の不可能性

カフカをめぐる時代状況を次の三つの側面から整理してみる。勿論これらの側面は独立してあるのではなく、互いに入り組み、状況全体をなしている。

1) ユダヤ教的側面

ステファン・モーゼス(Stéphane Mosès)は次のように述べる。

「啓蒙主義以来ヨーロッパ文化の基本的な現象である伝統批判が、…

…つまり（ヴァルター・ベンヤミンの言葉を借りるならば）例の伝統の罹病というものが、……当時のユダヤの伝統のなかで掟を——父親の掟として——ラジカルに疑問視する形を取っている……」¹¹

モーゼスは、カフカと同世代のドイツ系ユダヤ人であるカバラ研究者、ゲルショム・ショーレム(Gershom Scholem)について述べる。そして、ショーレムが自分達の世代を、「父親からは、時の経つうちに、もう全く内容のないものとなってしまったユダヤ教にどこまでも忠実であり続けるという空虚な掟しか伝えてもらえなかった、そういうユダヤ人の息子たちの世代」と特徴づけていることに言及する。つまり、この世代にとって、ユダヤ教の「掟は無条件の服従を要求するが、しかし理解できないもの、意味のないもの」と考えられていた、というのである。(Ibid., S. 16)

モーゼスの指摘するところのものが、カフカの『父への手紙』(*Brief an den Vater*)の中に見出される。カフカはそこで、曖昧な形でしか伝えられないユダヤ教に無条件の服従を要求する父親に対して、憤っている。

「やがて青年期になると、ぼくには、どうしてあなたが、ご自分でものにされていた形ばかりのユダヤ教をたてにして、全く同じ程度に形ばかりのものをいささかなりと発展させる努力をぼくがしないといっ
てなじることができるのか、分からなくなりました。」¹²

少なくともカフカにとって、ユダヤ教は「形ばかりの」ものなのである。カフカはユダヤの伝統に対して、それが曖昧で形骸化していると思うがゆえに、懐疑的なのである。

2) 社会的側面

パーベル・アイスナー (Pavel Eisner) はおよそ次のように述べている。

中世期、プラハのユダヤ人はチェコ語とチェコ文化に直接的な生きた接触を保っていた。しかしハプスブルク家の圧力により、徐々にユダヤ人のドイツ化が押し進められ、マリア・テレジアとヨーゼフⅡ世の時代を通じてドイツ化政策は完全に達成される。ゲットーは廃絶され、ユダヤ人には

ドイツ語系の学校への入学が公的に要請される。彼等は当時最高度の文化を誇っていたドイツに同化してゆくことになる。

チェコの独立戦争である白山の戦い（1620年）に敗北したチェコ人は、ドイツ人によって、宗教、文化、言語、社会生活などの面で圧迫を受け、貧窮とプロレタリア化が彼等の上にのしかかってゆく。だがこの戦いによって壊滅的に見えたチェコ文化は、ヨーゼフⅡ世の中央集権化とドイツ化政策に対する反動として、再生し始める。これは文化的政治的な国民運動へと発展し、それによってドイツ化していたチェコ人は自らの母国語へと帰り、19世紀後半にはプラハは徐々にかつてのチェコ人のプラハに戻ってゆく。社会学的に言えば、チェコ人達はきわめて健全で、首都プラハと地方および農民階級との間には、豊かな生物学的コミュニケーションが保たれていた。

一方、常に支配者によって成り立ち、背景としての人民もプロレタリアートももたず、一切のチェコ的なものを排斥していった、少数派であるドイツ人集団は、ひとつの社会的文化的ゲットーと化してゆく。

カフカが生まれ育った時代、プラハ市の人口100万のうちドイツ人は僅か6万であり、そのうちドイツ化したユダヤ人の占める割合は85パーセントだった。つまり支配階級であるドイツ人とは、殆どが同化したユダヤ人だったのである。彼等は「ドイツ人」ではあったが、周囲にはドイツ人はおらず、国民共同体もなく、チェコ人の中で全く孤立していた¹³。

つまりカフカの時代、ユダヤ人達はチェコ人からもドイツ人からも隔てられていた。そのうえ帝国からも遠く隔てられていたのである。マルト・ロベールは次のように述べる。

「プラハでは、このオーストリアは官僚主義の巨大な組織のなかにしか、……ユダヤ人から敬われる皇帝が全く滞在することのないフラチーンという城にしか、ほとんど姿を見せないのだ。……（ユダヤ人達は）狭く隔離され、政治権力とともに、……首都をもうばわれた、言語少数派を形成している。背後に生きた国民をもたない極度に不均質なグループのなかにあって、同化の努力が大いにはかどることなど絶対にありえない。」¹⁴

国民共同体もなく、帝国からも隔てられ、チェコ人に囲まれ、周囲にはドイツ人がいない。いるのはユダヤ人ばかりである。そのような環境の中で、どのような同化の方法が残されていたのだろうか。

残されていたのは、マルト・ロベールが「ドイツ語信奉」(germanisme)と呼ぶところの言語による同化である。

3) 言語的側面

マルト・ロベールは、当時のプラハ・ユダヤ人達の「ドイツ語信奉」について次のように述べている。

「生まれ故郷，祖国，現在，過去といった，運命が……（彼等）からとりあげた一切のものの代理を，……国語（ドイツ語）が果たしている。」(Ibid., S. 50)

マルト・ロベールは以下のように述べる。

ドイツ語とはゲーテ，シラー，ドイツロマン派を伝達してくれる教養の言語であり，19世紀の終り頃には，ドイツ語に対するユダヤ人の愛着は，きわめて深く根をおろし，宗教のように拡がっていた。そして，ドイツ語は彼等の「精神を高めてくれる国語」であり，この伝達手段のおかげで，ユダヤ人達は「自分が本当に高貴になったように」感じた。また，支配者の言語であるドイツ語は，ハプスブルク帝国の公用語として，「《立身出世する》ことを望むすべての人々に当然必要とされる」ものであり，ドイツ語はユダヤ人に「エリート社会に……密かに属している感情」を与えた。

しかしこの言葉による同化も，結局は不可能なものであったとマルト・ロベールは言う。つまりユダヤ人達のこの同化の方法は，「外部的にはいかなる現実性をももつにいたらず，抽象的で架空なつくりものにすぎず，外の世界とちょっと接触するだけでその正体が暴露されるていの幻想」にすぎない，というのである。(Ibid., S. 50-54)

カフカはマックス・ブロート (Max Brod) 宛の手紙に，イタリア北部の都市メラノ (Merano) で出会ったオーストリアの将軍がカフカの喋るドイツ語の響きを非常に訝しがり，一体カフカが何者なのか，を探るよ

うな眼で、見つめてきたことを書いている。(Ibid., S. 21)

カフカ達の喋るプラハ・ドイツ語(別名クラインザイテ・ドイツ語: Kleinseitnerdeutsch)は、単に発音だけが本来のドイツ語と異なるのではなく、ヴァーゲンバッハ(Klaus Wagenbach)によれば、この言語には前置詞の誤用、再帰代名詞の拡大使用、定冠詞の脱落、語彙の貧困化がみられるのであり¹⁵、したがってカフカがみずからドイツ人として話し、振る舞っても、オーストリアやドイツのドイツ人達からみれば、カフカは異邦人なのである。

したがってマルト・ロベールは次のように結論を下す。

「プラハの若者達は、我が家にあれば……まるでドイツ人であるかのように生き、考え、書くのだが、一步彼等の界限を出れば、誰も彼等を見間違えることはない。……たしかに彼等は同化しているものの、それはもっぱら、借りもののドイツ主義の行われる閉ざされた空間のなかのことで、……こう言ってよければ、彼ら自身の祖国喪失に《同化》しているのだ。」(Robert: a. a. O., S. 55)

プラハ・ユダヤ人のドイツへの同化は「幻想」でしかない。だがこの幻想をカフカの両親は楽観的かつ盲目的に信じており、息子にドイツ人になることを要求する。しかもこの要求には矛盾がある。ロベールによれば、彼等は「ドイツ語信奉とユダヤ教とが相容れないふたつの憧れであると見做さず、……前者のドイツ語信奉を奨励し、かつ後者のユダヤ教を維持すること」(Ibid., S. 53)を息子に望むのである。だが、既に述べたように、カフカはこのユダヤ教に懐疑的であり、彼にとって、それは全く無意味なものでしかない。

ドイツへの同化のために努力することは空虚な幻想への前進を意味し、ユダヤ教を無意味なものとする以上、ユダヤ教を中心とした伝統を生きる本来のユダヤ人へと後戻りすることは、不可能である。これがカフカの状況なのである。

4 『学会への報告』にみられるカフカの状況

カフカの状況は、そっくりそのまま『学会への報告』の報告者、猿のロートペーターの状況である。ロートペーターが「猿であることをやめた」(E. 150)ことは、カフカが本来の意味でのユダヤ人であることをやめたことと一致している。ロートペーターの捨て去った過去とは、カフカが捨て去ったユーデントウム (Judentum: ユダヤ教, またはユダヤ教を中心としたユダヤ世界) を意味する。ロートペーターが過去へ戻れないのと同様、カフカはユダヤ世界へは戻れないのである。

マルト・ロベールによれば、カフカは、1911年に東方ユダヤ人の俳優イサク・レヴィ (Isak Löwy) に会い、自らをユダヤ人として強烈に意識するまでは、ユダヤ教には殆ど無関心であったが (Robert: a. a. O., S. 48-49), その間、カフカはドイツ語系の小学校、ギムナジウム、大学に通い、ドイツ人になる教育のもとにあったのである。ドイツ語系ギムナジウムでの厳格な授業カリキュラムと、カフカ達プラハ・ユダヤ人生徒の勤勉ぶりを、ヴァーゲンバッハは詳細の限りを尽くし、調べ上げているが (Wagenbach: a. a. O., S. 34-65), この勤勉ぶりは猿ロートペーターが教師の待つ五つの部屋を「部屋から部屋へと跳び歩いて、授業を受けた」(E. 154) 光景を思わせる。

この教育こそ、カフカの両親の世代が、あるいは時代の趨勢が、カフカ達に強要したものであり、それはドイツ人になれるという幻想に基づいていた。カフカ達ユダヤ人生徒がこの虚しい幻想に向かって突き進んだのと同じように、ロートペーターは人間になるために、「たとえ出口が錯覚にすぎなかりうと」(E. 150), ひたすら突き進んだのである。ロートペーターは報告する。「わたくしが人間同様になったら、(檻の) 格子を引き上げてやるなどと、誰が約束したわけでもありません」(E. 151-152)。しかしロートペーターは約束されている訳ではない「出口」に向かって突き進んだのである。同様に、ドイツ人になればユダヤ人の未来は約束されているという訳ではないにもかかわらず (というのも、それは多くの問題を孕むという以上に、そもそも不可能だからであるが、), カフカ達生徒はその幻想に向かって突き進んだ。時代の趨勢がカフカ達に強要してくる限り、ロ

ートペーター同様、他を選ぶ自由がないからである。ロートペーターは言う。「自由を選ぶことは不可能だという 前提に立つ以上、 ほかの道はありませんでした」(E. 154)。

ロートペーターは自分が切り捨ててきた過去を、同棲しているチンパンジー娘の眼に見出し、苛立つ(E. 154)。これはドイツ化したユダヤ人達がイディッシュ語(大衆ユダヤ語とでもいうべき言語)に、切り捨ててきた過去を見出し、嫌悪する心理(Robert: a. a. O., S. 51)を思わせる。過去から吹いてきた風がロートペーターの「踵をひやりとさせる」(E. 148)が、これも過去に対する苛立ち、落ち着かなさを表している。

カフカは後方の伝統から隔てられ、前方の同化は不可能であるという状況にあった。この状況がロートペーターの 出口のない「檻」(E. 149)という比喩に表現されている。

『学会への報告』は1917年に書かれている。つまり第一次大戦中であり、オーストリア・ハンガリー帝国が崩壊し、プラハがチェコ人達の首都になってゆき、ドイツ人となって帝国の支配階級に属することができるというプラハ・ユダヤ人達の幻想が幻想ですらなくなってゆく過程である。カフカの親友マックス・ブロートはシオニズムに「出口」を求めてゆくが、カフカはどっちつかずの浮遊状態を固持する。ユダヤ教へも行かず、新たな出口へ向かおうともしないのである。そのため、カフカの自己同一性の危機はいっそう深刻になる。

ロートペーターは次の言葉で報告を締め括っている。

「報告のみがわたくしの旨とする所であります……。 」(E. 155)

『学会への報告』は文字どおり報告という形式をとっている。つまり独白でも友人への打ち明け話でもなく、学会という権威への、いわば告白である。ミッシェル・フーコー(Michel Foucault)によれば、「告白」とは権力関係へ組み入れられることによる「主体＝自己同一性」の獲得行為である¹⁶。すなわち権力に自分という人間を認知してもらうことで、主体

＝自己同一性を権力に保証してもらう行為である。自己同一性の危機に苦しむカフカはこの意味での「告白」を、物語の中で、自分の分身であるロートペーターにさせているのかもしれない。自分はまさしくこういう者であると、権力ならぬ読者に認知されるために……。

テ キ ス ト

Kafka, Franz: *Sämtliche Erzählungen*, Frankfurt a. M. 1991.

引用は略記号 E. とページ数で本文中に示した。なお邦訳は新潮版『決定カフカ全集1』(川村二郎／円子修平訳)を参照させていただいた。

注

- 1 Bridgwater, Patrick: *Kafka and Nietzsche*, Bonn 2. Auflage 1987. S. 127-131.
- 2 Lee, Joo-Dong: *Taoistische Weltanschauung im Werke Franz Kafkas*, Frankfurt a. M. 1985. S. 158-162.
- 3 Canetti, Elias: *Der andere Prozeß, Kafkas Briefe an Felice*, München 1969. S. 122.
- 4 Dietzfelbinger, Konrad: *Kafkas Geheimnis*, Freiburg im Breisgau 1987. S. 85-87.
- 5 Mecke, Günter: *Franz Kafkas offenes Geheimnis, Eine Psychopathographie*, München 1982. S. 115-117.
- 6 Hiebel, Hans Helmut: *Die Zeichen des Gesetzes—Recht und Macht bei Franz Kafka*, München 1983. S. 124-128.
- 7 Emrich, Wilhelm: *Franz Kafka*, Bonn 1958. S. 127-129.
- 8 三島憲一『戦後ドイツ——その知的歴史』岩波書店, 1991年, 55—64ページ。
- 9 喜多尾道冬編『カフカとその周辺』審美社, 1974年, 57—58ページ。
- 10 *Wege der Forschung, Franz Kafka*, hrsg. von Heinz Politzer, Darmstadt 1980. S. 357-364.
- 11 *Franz Kafka und das Judentum*, hrsg. von Karl Erich Grözinger, Stéphane Mosès und Hans Dieter Zimmermann, Frankfurt a. M. 1987. S. 15.
- 12 Kafka, Franz: *Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande*, Frankfurt a. M. 1987. S. 144.

- 13 Eisner, Pavel: *Franz Kafka and Prague*, New York 1950. S. 15-27.
- 14 Robert, Marte: *Seul, comme Franz Kafka*, Paris 1979. S. 49-50.
- 15 Wagenbach, Klaus: *Franz Kafka—Eine Biographie seiner Jugend 1883—1912*, Bern 1958. S. 84-85.
- 16 Foucault, Michel: *L'Histoire de la sexualité, I, La volonté de savoir*, Paris 1976. S. 78-79.

主要参考文献

ジル・ドゥルーズ：『フーコー』，宇野邦一訳，河出書房新社，1987年
内田隆三：『ミッシェル・フーコー』，講談社現代新書，1990年
マルティン・ハイデガー：『技術論』，小島威彦，アルムブルスター共訳，理想社，1965年。

Ein Interpretationsversuch zu Franz Kafkas „Ein Bericht für eine Akademie“

— Aus historisch sozialer Sicht —

Hisashi KITAGAWA

In vorliegender Abhandlung zu Franz Kafkas „Ein Bericht für eine Akademie“ betrachte ich die historische und soziale Situation damals, denn das Werk hängt eng mit ihr zusammen. Drei Gesichtspunkte werden berücksichtigt.

1) Der jüdische Aspekt: Kafka war vom Vater gezwungen, dem jüdischen Gesetz zu folgen, das er aber für sinnlos und ein „Nichts“ hielt. (Er ärgert sich darüber in „Brief an den Vater“.) Das Gesetz war für ihn ein Zwang, dessen Bedeutung er nicht verstehen konnte.

2) Der soziale Hintergrund: Von den Einwohnern der Millionenstadt Prag sprachen nur 6% damals Deutsch als Muttersprache. Die Juden hatten kaum Berührung mit den Deutschen aus Deutschland oder Österreich und isolierten sich in Prag, von Tschechen umgeben.

3) Das sprachliche Problem: Die Juden assimilierten sich also nur im sprachlichen Bereich. Die deutsche Sprache war für sie einerseits das Überlieferungsmittel, durch das die deutsche Kultur wie Goethe, Schiller, die deutsche Romantik usw. gebracht wurde. Andererseits war Deutsch nötig, wenn man zu den höheren Klassen in Prag gehören wollte. Aber das Pragerdeutsch, d. h. „Kleinseitnerdeutsch“, das Prager Juden wie Kafka sprachen, hatte „den falschen Gebrauch der Präposition, die Erweiterung des Refle-

xivums, die Weglassung des bestimmten Artikels und die direkte Verarmung des Wortschatzes“. Für die Deutschen aus Deutschland oder Österreich war Kafka also ein Fremder, obwohl er zu Hause lebte, dachte und schrieb, als ob er Deutscher gewesen wäre.

So war für ihn die Assimilation, an die seine Eltern optimistisch und blindlings glaubten, unmöglich. Sie zwangen ihn, sich zu assimilieren und sich zugleich dem jüdischen Gesetz zu fügen, dem er aber skeptisch gegenüberstand. Für ihn war beides unmöglich.

Diese Situation Kafkas entspricht der der Hauptperson, „Rotpeter“ in „Ein Bericht für eine Akademie“. Rotpeter kann nicht zu seiner Vergangenheit (d. h. seinem ursprünglichen Affensein) zurückgehen, so wie Kafka nicht zu seinem ursprünglichen Judentum. Rotpeter findet im Blick eines kleinen „Schimpansen“ „den Irrsinn des Tieres“ (d. h. seines vergangenen Affendaseins) heraus und ist darüber gereizt — wie Kafka über das Judentum, das seine Eltern ihm aufdrängten. Um Mensch zu werden, wurde Rotpeter „beaufsichtigt mit der Peitsche“, abgerichtet und er lernte von Lehrern — wie Kafka im Gymnasium streng geschult wurde, um sich zu assimilieren. Durch das Bild Rotpeters berichtet Kafka den Lesern von seiner eigenen Situation.